



全国国公立幼稚園・こども園 PTA連絡協議会

会報



第63号
発行 者
全国国公立幼稚園・こども園
PTA連絡協議会
会長 山 崎 篤 史
事 務 局
岡山県倉敷市玉島阿賀崎1-2-31
玉島テレビ放送(株)内
印 刷
株式会社玉島活版所

「子どもを守る幼児教育と保育とPTA活動」

全国国公立幼稚園・こども園PTA連絡協議会
会長 山 崎 篤 史



いつも子どもたちを大切に想い、この会報を手にとっていただいております全ての皆様に、心から感謝を申し上げます。

デフレの時代に慣れてしまっていた世代の私たちにとって、物価が上昇し続ける現状をととても不安に感じます。子育てをしていく上では必要な出費がたくさんあります。価格の上昇が著しい食料品についても、子どもたちの健やかな成長を思うと本当に大変な時代に突入してきたと実感する日々です。そんな中においても、子どもたちの笑顔に接し幸福を体感するたび、子どもがいてくれるということ、存在こそが尊いのだと本当に感じます。全国各地で子どもたちを守っていただいている皆様に、心から御礼を申し上げます。

子育てや教育現場に身を置かれているPTAの仲間の皆様にとっても、やらなければならないことに追われる日々を過ごしながら、常に心にとどめていることとして、様々な課題からどうやって子どもたちを守っていくかという思いがあるのではないのでしょうか。

近年、いじめの重大事態の発生件数（令和5年度:1,306件→令和6年度:1,405件）や小・中学校における不登校の状況（令和5年度:346,482人→令和6年度:353,970人）について、増加傾向にあるという報道がなされています。

幼稚園・こども園を卒園すると、小学校に入学します。小さな子どもたちに関わる保護者・教職員の先生方が所属する団体として、不安を感じます。卒園後の環境が、小さな子どもたちにとって安全安心なものになるよう周囲の大人の心配りが必要です。学校は、そもそも教育を提供する施設であって、こどもたちの可能性（未来）を育む要素が多分だったと思います。つまり、今、目の前の子どもたちを救う福祉の機能を主体的に担っていなかった。現場の大人に頼るのではなく、国全体で対処しなければならない数

字になっていると思います。実際に、こども家庭庁こども家庭審議会においても、子どもたちを守るための重要な課題として取り上げられていました。

子どもは、大人が目配り心配りをして守らなければ、けがもするし病気にもかかります。いじめや不登校についても、同様の要素もあろうかと思っています。子どもたちが小さな時期、私たち会員の関わる幼稚園・こども園の時期のこどもたちにかかわる大人は、子どもが小さいゆえに過保護なくらい目配りや心配りをしています。変化の激しすぎるこの時代、その大人が気を付けて見るべき時期を環境的にも長く考えなければならない時なのかもしれません。こども家庭審議会では、学校という教育機関に、子どもたちを助ける即時性という福祉分野の視点からの議論もなされています。義務教育に先んじて幼稚園・こども園においては、教育と保育（福祉）は事実上、融合しています。先進性より研究いただける立場にあらうかと思っています。今後、より幼児教育・保育に注力されるように、本会としても努力が必要かと考えています。

また、ここでPTAの果たすべき役割も小さなものではないと考えます。子どもたちに対する心配りや目配りは、多くの大人、多様な立場の大人がかかわれば良いに決まっています。国を始め行政・教育機関にとどまらない幅広いセーフティネットを展開するには、PTA組織に勝る組織はないと思います。国と現場をつなぐ役割は、以前にもまして高まっていると言えます。

優しい大人が、子どもたちを守る社会であってほしい。その実現を仲間の皆様とともに目指したいと思います。

結びに、すべての子どもたちと子どもたちにかかわる皆様に、多くの幸せと輝かしい未来が開かれますことを心から心から祈念申し上げます。

特別寄稿

「PTAの在り方」

元全幼P会長 萬里小路 伸一郎

大変ご無沙汰しております。と言っても、若い会員の皆様には「誰？」ってなりますが、私は2005年から2013年まで本会の会長を勤めさせて頂いた70歳のOBです。私が発行者としての初めてのこの会報では、河合隼雄先生に「大切にしたい幼児期の子育て」という題目で特別寄稿をご執筆頂きました。当時、いろいろなご示唆を頂いた先生の年齢に近づいたと思うと感慨深いものがあります。

とは言うものの、最近不勉強で、特別寄稿は荷が重いのですが、起稿にあたり、昔のこの会報をはじめ国公立の「幼稚園じほう」や「文部科学時報」など自分の寄稿を読み返してみると、幼児教育の大切さや国公立幼稚園・こども園の素晴らしさをいっぱい書いていました。それらのことを教えて頂いた国公立の先生方や本会の先輩方にあらためて感謝するなか、その信条を次の世代に繋いでいかなければならないと思っていますが、ここでそれを繰り返すと屋上屋を架すことになりそうなので本稿では、37歳で単Pの会長になってから昨年会の顧問を引退するまでに感じたPTAについて述べたいと思います。

もともと我が国のPTAは戦後GHQの指導のもと、文部科学省の勧奨でできたもので、その役割は、「父母と先生の会（PTA）は、児童生徒の健全な・・・（中略）・・・その他の必要な活動を行う団体である」（「父母と先生の会の在り方について」社会教育審議会報告昭和42年）とされています。飛ばしすぎですがお調べください。確かにPTAは社会教育団体として認知された重要な団体ですが、官主導で発足し、長い歴史があるためか、その運営に会員が大きな負担感を感じるのも事実です。役員選出の時期に暗い気分になったり、仕事・家事との折り合いをつけるのに苦労するのはよく聞く話です。

でも、もしPTAが自然発生的にできたとしたらどうでしょうか。ある保護者が子どもや園のためにしたいと思ったお手伝いに、賛同する人が集まり、更にその輪が広がったという活動がPTAとしてふさわしい活動だと思います。

PTAはボランティアですから、活動は子どもの環境を良くするために少しでも貢献したいという思いの発露です。自分の限界を越えて行うものではありません。PTAとしてはならないことはありますが、しなければならないことはありません。

関わる人数が多いと、情報の共有や交換のためルールや組織が必要になり、規約や役員ができて、ガバナンスや公平性に気を取られてしまいがちですが、子どものため、できる人ができる範囲でするのがPTA活動です。

そして、有難いことに、そのような活動をすることで保護者が、本当の幼児教育と実践を理解するきっかけになります。

それがPTAの最も重要な役割だと考えます。

ここまでは、PにとってのPTAのはなしですが、TにとってのPTAにはもう一つ役割があります。

PTAは、理解されにくい幼児教育について保護者が学ぶ場であるとともに、広く社会に幼児教育の重要性和国公立幼稚園・こども園がその核であることを発信する場です。

参観や運動会、発表会等出来上がったものを披露するだけでは伝えきれない、園が行っている幼児教育の真価を、少なくとも自園の保護者により知っていただく機会を提供する場がPTAだと思います。

会員数が減少するなか、人材を探すのは苦勞しますが園の幼児教育を少しでも多くの人に伝えようという視点で探すと、私や本会の役員のように幼児教育にはまってしまいう人が必ず見つかります。

そのような人たちはご自分の分野で、国公立幼稚園・こども園とその幼児教育を守る動きを始めます。

全幼Pはこの理念で60年以上活動してきました。

我が国でもいずれ幼児教育の義務化が本格的に議論されることになり、その時フェーズが変わります。

その日に備え、単Pも連Pも全幼Pも、あるべき姿のPTAを模索し続けたいものです。

第63回 全国国公立幼稚園・こども園PTA全国大会 いわて大会

いわて大会実行委員長 岩渕 弘喜

令和7年8月9日・10日の2日間、岩手県盛岡市にて「いきる力を育み わかり合い てをつなぎ合うこどもたち～復興に取り組み、お互いを幸福に守り育てる希望郷いわて～」というテーマのもと、第63回全国国公立幼稚園・こども園PTA全国大会「いわて大会」が開催されました。文部科学省 大臣官房 審議官 橋爪 淳 様をはじめ多数のご来賓をお迎えし、全国各地よりご参加いただきました皆様ありがとうございました。

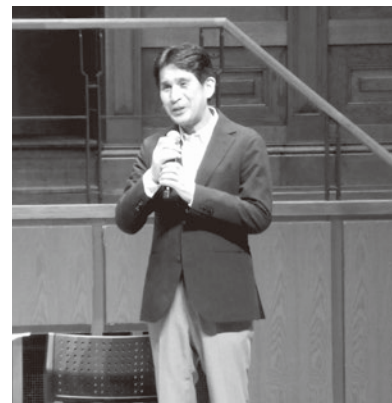
また、無事に開催することが出来たのも、山崎会長をはじめ、役員や理事、事務局の皆様、そして岩手県関係者の皆様のご協力があったからこそだと思っております。本当にありがとうございました。

大会1日目は、役員会、理事会、情報交流会が行われました。情報交流会では、アトラクションとして盛岡大学・盛岡大学短期大学部さんさ踊り実行委員会の学生達が躍動感のあるさんさ踊りを披露してくれました。情報交流会に参加された皆様にも、さんさ踊りに参加していただき楽しい交流会になったのではないのでしょうか。

大会2日目は、オープニングとしまして会場である盛岡市民文化ホール・マリオスに設置してある、パイプオルガ

ンの演奏から始まりました。記念講演では岩手のソウルフード福田パン代表取締役、福田潔氏による「おかげさまを『フランス』に挟んで77年」～社長が日々想うこと～と題まして対談方式で講演していただきました。講演後には福田氏のご厚意により、参加者全員に岩手のソウルフード福田パンを提供していただきました。

提案発表では、北海道、新潟県、山口県からPTA活動について発表していただきました。コロナ禍の収束でPTA活動の本格的な復帰によって、3園それぞれが子供たちのために、時代のニーズに合わせ、園とPTAが丸丸となって活動を進めている姿を感じ、多くの学びがありました。日頃からのPTA活動を通して「人と人とのつながり」が大切だと改めて思いました。



いわて大会で地方大会が最後という中で、実行委員長という立場で運営にかかわることができ、貴重な経験をさせていただきました。また、本大会を開催するにあたり、無事に終えることができたのも、いわて大会実行委員会の皆様、会員園の先生方、PTAの方々、講師をお引き受けしてくださった福田様、オルガニストの渋沢様、そして全国からお出でくださった参加者の皆様のお力添えの賜ものと心より感謝申し上げます。ありがとうございました。



記念講演

「おかげさまを『フランス』に挟んで77年」 ～社長が日々想うこと～

講師 有限会社福田パン代表取締役

福田 潔 氏

進行 一関市立赤荻幼稚園園長

千葉 敏之 氏

千葉： 福田社長の講演会ですが、今回は対談形式で、私が司会進行をさせていただきます。私は、福田パンそのものが好きですが、三代のおじいちゃん、お父さん、そして現社長が会社をどのように地域に愛される会社にしてきたかというのをちょっとだけ知っております。その素晴らしさを最後の地方大会の盛岡でぜひ皆さんにお伝えしたいと思っております。残念なことに、現社長は、10個くらいいいことをしても4個くらいしか言いません。ですから、私が質問し足しながら後は答えが足りない時はもう一回という感じで、とにかくどんどん掘っていきたいと思います。よろしくお願いいたします。

それでは、最初に福田パン77年の歴史を6分間の動画にまとめてみましたのでご覧ください。

＜動画視聴＞

福田パンは、昭和23年に現在の本店のある盛岡市長田町で創業し、令和5年には75周年を迎えています。創業者は福田留吉さん。現在の花巻市小瀬川の及川家に生まれます。その後後の花巻農学校へと進学します。後に児童作家の宮沢賢治が教師として赴任し、留吉さんも賢治先生から多くのことを学びました。卒業後は賢治先生の計らいで、盛岡高等農林学校、現在の岩手大学農学部の手伝いとなります。そこで発酵を学んだ留吉さんは大阪市立衛生試験場を経て、大阪の丸木イースト研究所でイースト研究に取り組みます。

敗戦を機に岩手に帰郷。進駐軍からの委託で仙台の官公庁の監督を担います。

その後、研究所から譲られたドライイーストをもとに、福田製パン店を開業します。この時、仙台のパン工場に指導のためにやってきていた

カナダ人パン職人からもらい受けたイラストをお店のトレードマークにします。これが現在の福田パンのロゴになっております。

昭和24年に設立された岩手大学に関心があった留吉さんは、安い値段で学生を満腹にさせたいとの思いから、フランスパンを改良したソフトフランスパンを開発します。これが現在の福田パンのコッペパンの基になっています。その名残で、社内では今でも「フランス」という愛称で呼ばれています。福田パンの代名詞であ



るあんバターは意外なきっかけで誕生しました。現社長のお母さん、睦子さんは、あんことバターひとつずつの注文を勘違いして塗り重ねてしまったのです。作り直してお渡しした後、残ったパンを食べてみると、これまでにない絶妙な組み合わせ。メニューに加えることにしました。

昭和63年、二代目の雅俊さんの時に矢巾町に工場を設立します。大手食品センターなどと取引するようになり、県内各地で販売することになります。このような歴史を経て、福田パンはいつしか盛岡のソウルフードと呼ばれるようになりました。留吉さんから雅俊さん、潔社長へと脈々と受け継がれるコッペパンの味は、盛岡のみならず、多くの岩手県民から愛されています。

千葉： それではご紹介いたします。ご講演をいただきます 有限会社代表取締役社長の福田さんです。

福田： この大きな盛大な会に呼んでいただき、誠に光栄に思っております。私、昔サッカーをやっておりまして、その頃、千葉先生が中学校のサッカー部の、岩手では断トツのチームを作る先生でございまして、私も将来はこのようなサッカーの指導者になりたいと思い憧れていた方でございます。その先生に「福田、檀上に上がれ」と言われたら嫌とは言えません。二つ返事で参りました。本日はよろしくお願いいたします。

県外からも多くの方がいらっしゃると思います。盛岡はおいしい食べ物がたくさんあります。その中の一つとして食べていただけることは、ここで商売していて本当に幸せなことだと思っております。

千葉： 留吉おじいさんが2年生の時、賢治先生は、自分で

作ったお話を授業で読みました。留吉さんはそのお話が心に刺さったようです。目の前でそのお話を読んでくれた担任の先生がいずれ長く地域、日本で愛される作家になるとは知らず、純粹にそのお話に感動し、放課後、職員室に行ったそうです。「先生、とてもいい話でした。忘れたくないので原稿を貸してください。忘れたくないので書き写します」と、400字詰め原稿用紙39枚の原稿を留吉さんはお借りし、二晩で書き上げたそうです。それだけ感動した本ようです。題名は「貝の火」。『名声や力を得ると、人間はいかに慢心し、道を誤る』という人間の心の弱さや誠実さや謙虚さの大切さを語っている物語です。

留吉おじいさんは、お腹を空かせて困っている人に食べ物を分け合いたい、救食という造語を大変愛しておりました。福田パンはお客様第一、そして、二番目に従業員。この二つを大切に留吉さんは福田パンをスタートさせたということです。私はこの話を聞きたびに留吉じいさんと一緒に暮らしていたこの社長さんがどんな生活をしていただろうと思います。では質問です。留吉おじいさんが宮沢賢治先生の教え子であったことは知っていましたか？

福田： 直接詳しく聞くことはできませんでしたが、宮沢賢治研究家という方々がよくじいさんのところに取材にきて話をしているのを小さい頃から聞いていたので、そんなすごい方とは知らずに何かそういう人と関わりがあるんだなぐらいの感じで知っていました。あと、じいさん、ちょっとハイカラで、賛美歌を歌っていました。キリスト教でなく、仏教ですが。もしかしたら、賢治先生の影響かと。今思えば賢治先生はハイカラな方だったそうです。



千葉： 社長は留吉おじい様とは何歳まで一緒にくらしていたのでしょうか？

福田： 15歳ですね。中学校3年生の時に亡くなりました。

千葉： 社長から見て、留吉おじいさんという方は、どんな方でしたか？

福田： 孫からすると、優しいじいさん。よく宿題をさぼって遅れると怒られる厳しいじいさんという感覚でした。自宅兼会社でしたので社員とのかかわりも間近で見えていましたが、とにかく一生懸命やる社員に対しては、しっかり褒めてあげる。ただ、少し手抜きすることも人はあると思いますが、そういう時は厳しく叱る。叱

るといっても頭にきたから怒るではなくて、諭しながら叱るというやり方でした。何となく雰囲気覚えていきますね。じいさんは怠けることがなかった人でした。人様の命を預かる食べ物を作っているからこそ、怠けることは絶対いけない事。そこは厳しかったことを記憶しています。

千葉： 聞くとところによると、おじいさんは、お孫さんを面白い呼び名で呼んでいたようですが？

福田： 私、呼び捨てで呼ばれたことがなくて、潔さんとずっとさん付けで小さい頃から呼ばれていました。多分、宮沢賢治さんも、家では賢さん、石の収集が好きだったこともあり、石の賢さんなんて呼ばれたと聞きますので、もしかしたらこういう影響があったのではと結び付けたりもします。

千葉： ありがとうございます。社長はパンとは関係ない運送業をしており、東京から30歳に帰郷しました。その変の経緯についてお話をください。

福田： 高校を卒業して、継ぐためにパン学校に入り、パン部門で学びました。東京の新宿中村屋というベーカリーでパン作りを教わり、少しして、私の実家で人手不足だから帰ってこいと言われ帰ってきました。落ち着いてから、もう一回自由な時間が欲しい、ずっとこのまま稼業を継ぐというよりも、もう一回外を見たいと思い、東京に出してもらいました。かみさんと出会って、子供も生まれて、とにかくお金が欲しくて運送業で長く働きました。子供たちも1歳2歳と育ってくると、やはり、じいさん、ばあさんがいてくれるとありがたいと思いました。子育てに関しても、共稼ぎのため、ストレスがでてきて、それを子供にも感じさせてしまい、田舎ののんびりとした空気の中で過ごしたいと思い、また30歳の時に戻ってきました。

千葉： 留吉おじいさんがなくなった後にお父さんの雅俊さんが社長にになったわけですが、お父さんは大変意義深い方だったと聞いております。

福田： サティの倒産のことですが、倒産と聞いて同業である地元の大手業者が納品を止める、全国の同業者も納品を止めるらしいと聞きました。「福田さん、大丈夫か？」と連絡をいただき、先代の社長に話をしたところ、悩まれていました。

サティさんは、倒産は確実でも営業は続けるという発表されました。営業を続けるということは、そこにお客さんが買い物にくる。その時にパンコーナーが空というのはよくないのではないかと。卸というものを本格的に始めるきっかけはサティさんから声をかけていただいてからです。何か地元で面白いパンを扱っているそうだから持ってきてほしいとサティさんに目が留まり、福田パンのパッケージを作り始めました。今のコンビニやいろんなスーパーにお世話になるきっかけ

を作ってくれました。そういうご恩があるのに止めてはいけないと。お金がもらえるかはわからないが、お客さんのためにパンを提供しようということで、盛岡のサティさんしか取引していませんでしたが、岩手の一番南の一関のサティさんにも卸したりしました。

千葉： その後、お金は回収できましたか？

福田： 大きい額のお取引先には、支払いの枠があったようですが、福田パンはそこまでではないので、全額いただけました。その後、サティの販売部長、本部の方が関東の本社から御礼のお電話をいただきました。福田パンがどうやってお世話になったか、そして、私たちの考えについて電話でお伝えしたら、受話機の向こうですすり泣く声が聞こえました。偉い方とお話が出来、感謝をいただき、やっと恩返しことができました。父からすると、当たり前で、恩を受けたら返す、商売だけでなく、何かそういう持ちつ持たれつを感じた記憶があります。

千葉： お父さんは、常に地域の皆様に恩返しという言葉を使いながらご商売をしていたようです。これもおじいさんの留吉さんの教えではないかと思います。親子代々子供に何を伝えていくのか、私はこの三代の社長さんのお話を聞いて常々思っております。

福田パンの会社の組織の中で、通常ほかの会社であるものがないのです。それは何かというと、『営業部』がないそうです。福田パンはどうして販売が増えていくかというと、福田パンを口にした方が口コミで紹介する、あるいは自分の会社の上司に「これはいいですよ」と言って広げていくということで、全く自分たちからお店の売り込みに行くということがないそうです。しかし、全国的にどんどん名前が出ていくようになるのですが、そのきっかけは何だったのでしょうか？

福田： あれはですね、テレビ、雑誌、ラジオで取り上げていただいたことです。父が“ズームイン朝”に出演させていただいたり、“秘密のケンミンショー”で取り上げていただいたこと、その数週間後には、“嵐にしやがれ”という番組に連続で出させていただいたことですね。次の日から一気に観光地となってしまう、店にお客さんが入りきれなくなるという状態になりました。メディアの力で押し上げていただいたという感じがですね。

千葉： 厨川というところにお店がありましたが、現社長がおっしゃったようにお客さんが殺到し、路上駐車をしたりほかの車が動けないということで、お店を閉めたそうです。

岩手県全体、そして、県庁所在地である盛岡でさえも、人口がどんどん減っています。そして、福田パンは、盛岡市内に4店舗しかありません。ところが売り上げは2倍以上になっている。そういう状況でなぜ売

り上げが伸びているのか社長さん、説明をお願いします。

福田： 私が帰郷し、福田パンに入ったころは、盛岡から30分のエリアしか配達しないと決めたそうです。南は花巻、北は安比高原くらいまで。そこら辺のスーパーやコンビニとお取引をしていました。ただ、スーパーはチェーン店になっていましたので、範囲外のエリアのお店からも依頼は来ていました。父は、「無理することない。エリアは広げない」と決めていましたが、私が配達範囲を広げ、少しずつご依頼にこたえたいという気持ちで頑張りました。会社を大きくしようとは全く考えていなかったですが。

千葉： 2016年に台風の大きな被害がありました。その時、どんな対応されていたかということ、県の方から復興支援品を作ってほしいということで、岩泉の短角牛をパンにはさんで販売するというのをしました。そして、販売したお金を支援費として、差し上げています。これをきっかけに、岩手県各地の名産品を福田パンに挟んで売ることが増えてきました。

福田： はい、いろんな町からお声をかけていただき期間限定でやっています。

千葉： コロナの時期も盛岡市内のお店が全く売れないという状況がありましたが、その時も福田パンさんは、カツがおいしい店のものをパンに挟んで販売し、それを支援金として差し上げていた。福田社長は東日本大震災で親を失い学校に行けなくなった子供たちのための、岩手まなび募金に売り上げ金全額を入れております。

福田： 福田パンの面白いところは、現金しか使えないところ。電子マネー経費が掛かります。便利は便利ですが、お客さんと店員とのふれあいの回数を増やすようにしています。キャンプと同じだと思います。非日常を味わいたい、不便さが楽しい。便利さの裏側で楽しみたい。

千葉： スーパーで売っている福田パンを見ると機械を使っていると思いがちですが、パンにバター等を塗るのも、袋詰めも全て手作業です。買い手の皆さんへきちんと手をかけたパンを売りたいと手売りを貫いている会社ということをお伝えしたいと思います。留吉おじいさんが宮沢賢治先生と出会ったことから始まった救食、そして先代の雅俊さんは地域に恩返し、そして、ここにいらっしゃる三代目の潔社長はおかげさまの気持と



ということで、アットホームな手作りパンを心がけ地域密着、お客様第一で歩んでおります。

千葉： それでは最後の質問です。現在の福田社長の目標をお聞かせください。

福田： 目標。現状維持でできればいいと考えています。逆に小さくしたいなど。究極の夢ですが、家族とパートさ

ん数人で商売をやりたい。全部自分が手にかけたものを売りたいですね。

千葉： 今、社員はどのくらいいますか？

福田： 60数名社員がいます。その人たちの生活をしっかり守りながら、あとは行けるところまで行けたらいいですね。

千葉： ありがとうございます。

提案発表

「繋がり・関わり」を継続したPTA活動 ～新型コロナウイルスの収束、およびPTA活動の本格的な復帰～



北海道札幌市立
きくすいもとまち幼稚園
令和7年度会長

平 優

1.はじめに

北海道札幌市白石区は、札幌市の東部に位置しています。住宅地として発展し、バスだけではなく地下鉄・JRも通っていて交通の便も比較的良好な地域です。公園や緑地なども多く、散歩やサイクリングに適した場所もあります。工場や倉庫も点在しているため札幌の物流や軽工業の拠点でもあり、札幌コンベンションセンターや国際協力機構札幌国際センターなど海外との交流拠点もあるなど、人の活動が活発な地域です。

2.園の概要

本園は、豊平川のすぐ近くにあり、平成2年に開園し、令和7年4月時点では39名の園児がおります。PTA活動も、少ない園児数であることを生かし、保護者の皆様との積極的な関わりの機会を設けています。

近隣の小学校や保育園、町内会など地域の皆様とも交流をもつ機会が多く、たくさんの人に見守られて園児たちはのびのびと生活しております。



園の教育目標は「望ましい環境のもとで、人間性を培い、たくましく生きる、心豊かな子どもの育成」です。

〇よくかんがえ やりぬく こども

～自分なりに考える力、話をよく聞き、思いを表現する力

〇なかよく やさしい こども

～人と関わる力 思いやりの心

〇たくましく げんきな こども

～たくましい心、元気な体



園のマスコットキャラクター 『ネギーちゃん』

また昨年度、きくすいもとまち幼稚園では「一人一人が自分の力を発揮し、互いに育ち合うための環境の構成と援助」について『北翔大学 教育文化学部 教育学科准教授 工藤ゆかり氏』をアドバイザーに迎え、隣の厚別区にある札幌市立あつべつきた幼稚園と合同で研究を進めてきました。

今年度は「子どもの『やってみたい』があふれ、未来につながる幼児教育」という主題のもと『藤女子大学 ウェルビーイング学部子ども教育学科教授 大室道夫先生』をアドバイザーとして迎え、幼児教育と小学校教育の円滑な接続について研究を進めています。それに加え、札幌市の公立幼稚園として初となる幼稚園単独のCS（地域の子育ての拠点となるような実践・発信を行う活動）も本格的に始まり、子供たちにとってより良い環境づくりに繋がるのではないかと考えております。

3.PTA活動について

PTA組織は、会長1名、顧問1名、副会長2名（P1名、T1名）、書記・会計2名ずつ、監査2名を執行部としています。他の保護者の皆さんも各委員会に所属し皆で活動しています。

○学級委員会 ○手作り委員会

○環境委員会（資源・古着）

現在のPTAの大きな活動には、年に2回ほど開催される「手作り市」、秋ごろ開催される「こども縁日」があります。また、各委員会の打ち合わせと保護者同士の交流の場として、「合同委員会」も行っています。

<手作り市>

手作り委員会所属の有志の皆様により、エプロンや小物を制作し、園の保護者へ販売しております。

例年は布類を使ったエプロンや小物・人形が主体となっておりましたが、一昨年より「作りたい物を自由に作る」というスタイルも取り入れ、ビーズやレジン、粘土を使った小物が制作・販売され、大好評でした。



特にエプロンは安価だけでなく、子どもがひとりでも着用ができるような簡単なデザインになっているので、毎年多くの皆様にご購入いただいております。

また、北海道の幼稚園の特色といたしまして、長靴等の冬靴にかぶせる「カバー」や、手袋を落とさないための「手袋紐」も手作りされています。オリジナルデザインのものだと伺っており、代々作成されてきています。冬期間の外遊びに必須のものであるため、こちらも毎年多くの皆様にご購入いただいております。



<こども縁日>

毎年10月末に開催され、幼稚園協力のもとPTA主催で行い、保護者と園児が参加できるお祭り行事です。コロナ禍でも密を避けて開催を続けてきている、大きなイベントとなっております。

昨年度は、園児たちの手作りの魚で「魚釣り」、大きな的に向かってボールを投げるもぐもぐモンスター、「スーパーボールすくい」、「ヨーヨー釣り」、「工作コーナー」など、小さいながらも子どもたちが楽しめるような活動も行っております。園児だけでなく、一緒に参加した弟妹も参加することができるよう配慮しました。また、手作り市も同時開催しており、フェルト製の武器や人形、ビーズで飾り付けられた粘

土ケーキ、各種アクセサリ、くるくるレインボーという回すとキラキラ光るおもちゃなどが販売されておりました。バッグいっぱいに獲得したものを入れ、最後に園児と弟妹に駄菓子と光るおもちゃをPTAからプレゼントし、こども縁日は終了しました。

<合同委員会>

お祭りなどのような子ども主体のイベントとは違い、年に2回、保護者の皆様が子どもたちを預けた後に幼稚園内の1室に集まって、委員会ごとの打ち合わせをしています。それと共に、保護者同士の交流の場にもなっています。同じクラスの保護者でありながら顔も名前もわからないということが多い中、少しでも顔を合わせて交流を深めていきたい方には嬉しい会になるのではないのでしょうか。打ち合わせが終わってからも少し残っておしゃべりをしていきやすいように、お茶やお菓子をを用意して行っています。

4.おわりに

近年、PTA活動とはこういったものなのか、本当に必要なのかというお話をたくさん聞く中で、こうした保護者参加型のイベントを続けてこれたのも、保護者の皆様、地域の皆様、園の先生・職員の皆様など、多くの方々のご助力があってこそだと、本当にありがたく思っております。

きくすいもとまち幼稚園でも子供たちのための活動は勿論のこと、保護者や地域の方の「大人の」交流の場としても残しながら、保護者の負担の軽減を考え、PTA活動の見直し・スリム化を進めていくことができればと考えております。



提案発表

親子で一緒に、楽しく学ぼうSDGs

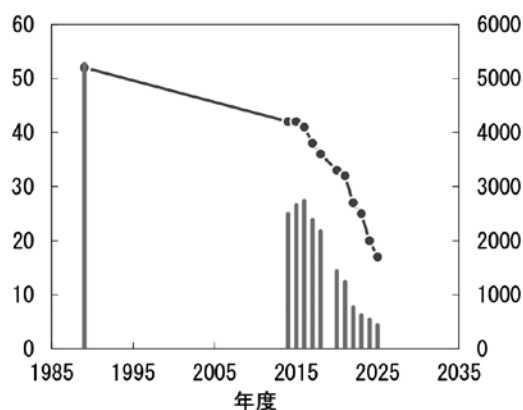
～子どもたちの未来のために、
PTAとしてできること～新潟県国公立幼稚園・こども園
PTA 連絡協議会 会長
大野 正貴

の産油量を誇った新津油田です。新津第一幼稚園はこの秋葉区新津の中心にあり、令和3年に創立70周年を迎えました。令和5年度から満3歳児の受け入れを開始し、令和7年度現在の園児数は年長組5名、年中組5名、年少組11名で、21名が在籍しています。年少組11名のうち、6名は前年度に満3歳児として早期入園した園児です。園は新津第一小学校と同じ敷地内にあり、行事等を通して交流活動を行っています。幼小連携として、1年生への入学支援やケア等も行っています。商店街や新津駅、コミュニティセンター、秋葉山などが近いので、散歩に出かけるなど、地域の中での活動も大切にしています。また、近隣園の先生方に公立幼稚園としての公開保育や研修会を実施したり、その際に指針を説明したりと、地域連携の一環として保育の質を高めようという公立の機能も果たしています。

①はじめに

新潟県内の国公立幼稚園は、平成元年（1989年）では当時の新潟県国公立幼稚園協会への加入園数52園、園児総数5,268名でした。しかしながら、平成24年（2012年）8月の子ども子育て関連3法の交付以降から幼児教育・保育の無償化やこども園化が進み、幼稚園の閉園や協会からの脱退が相次いだことで、令和7年（2025年）現在では加入園数17園、園児総数439名と10年余りでその数は激減しています。園数、園児数が少ないながらも、子どもたちへの教育の質を保ち、高めようと、先生方を始め保護者も一丸となって励んでいます。

その中で、子どもたちの未来のためにSGDsの一環として自然を大切にしてほしいという思いから、イベントや体験ではなく、経験で伝えることを目標に全県で取り組んでいるPTA活動を紹介します。

図1 新潟県内の国公立幼稚園・こども園協会
加入園数と加入園の園児総数の推移

②園の概要

新潟県国公立幼稚園・こども園PTA連絡協議会の事務局は、新潟市秋葉区に位置する新津第一幼稚園に置かれています。秋葉区は「花と鉄道と石油の街」として栄えており、花はチューリップ発祥の地、鉄道はSL、石油はかつて日本一

③PTA活動

本県PTA連絡協議会では、園数、園児数が少ないながらも全県で一つのテーマをもってPTAとしてできることに取り組んでいます。テーマは「環境にかかわる活動」です。自然保護や環境保全のために、子どもたちの身近なことでできることは何かないかと、各園で取組を考えて、計画を立て、親子と先生と一緒に活動し、取り組んだことについてオンラインで意見交換等の交流を行っています。この事業を持続的にやっていくことを前提にしているため、年少から年長まで可能な範囲でできることに取り組んでいます。子どもたちは外部講師の方々からの講話を聴いて、自分たちなりにできることややりたいことを実践しています。このテーマでの活動を通じて、少しでも子どもたちの中で、自分たちで考えることや生きる力を身につけること」に繋がってほしいと思います。

【ごみ拾い活動】

県内13園が、様々な場所でごみ拾い活動を行いました。ごみ拾いは園の周辺や海岸、公園、駅など地域の様々な場所で行い、集めたごみの回収もしていただきました。この活動では、事前にごみ拾いの際の注意事項を保護者や子どもたちに説明しています。例えば、①ごみ拾いは必ず大人と一緒にすること、②拾う時は周囲の車に気を付けること、③拾う時は手袋とトングを使うこと、④生き物の死骸や鳥の羽などに触らないこと、などを伝えています。子どもたちは次第に夢中になってごみを探すようになり、どんなに小さなごみでも見逃さないくらい、大人よりも上手に探して真剣に拾っていました。活動中には「どうしてこんなものが落ちているの？」誰かがポイ捨てしたかもしれないね。」どうしてポイ捨てするの？」良くないよ。」というやり取りもありました。また、地域の方々からは「ごみ拾いしてくれて、ありがとう。」、「えらいね。」という感謝の言葉や励ましの言葉をもらって、子どもたちは誇らしそうにしていました。自分たちが街のためや人のため

に役立っていることを認識して、達成感が得られ、環境への意識も育まれたように思います。



図2 園の周辺や海岸、公園、駅などの地域でのゴミ拾い活動の様子

【資源回収とリユース、リサイクル活動】

県内8園が、資源回収とリサイクル活動に取り組みました。家庭で出た牛乳パックや食品包装などの廃材を使った工作は子どもたちにとってはお手のもの。この活動では改めて、SDGsを意識した取組として捉えています。親子でいろいろな飾りつけをして、資源を集めることが楽しくなるようリサイクルボックスやオリジナルエコバッグを手作りしたり、廃材を使ったリサイクルから作品展、雑巾がけリレーに発展したりしました。エコバッグ作りでは、コットンエコバック

に子どもたちが思い思いに絵を描いて、楽しく使いたくなるようなエコバッグを作製しました。作品展では、牛乳パックやプラスチックごみからおもちゃを製作して、園内でフェスティバルを実施することで、子どもたちに廃材は自分たちが遊べるおもちゃに生まれ変わるという気付きが生まれました。雑巾がけリレーでは、まず家庭から回収した古タオルや衣類を雑巾に再利用できることを子どもたちに伝えることができ、また雑巾がけリレーに発展し、盛り上がりつつも自分たちの使う空間を大切にきれいにする意識の向上にも繋がりました。

【教養活動】

また、環境に関わる教養的な活動として、外部講師を招いた講演会、花いっぱい活動、園内ビオトープ清掃整備、絵本の読み聞かせ、子どもたちによる劇、などに取り組みました。講演会では各園で様々な取組がなされ、給食提供業者の管理栄養士の方に幼児期の食育について話を聞き、食品ロス問題を考える機会になりました。また、環境関連分野の方々からごみの分別、リサイクルについて、さらにプラスチック汚染による環境問題について話を聞き、ごみの分別意識が高まったことや海の生き物がプラスチックを誤って食べてしまって苦しんでいることを知り、子どもたちの中で海岸清掃やポイ捨て防止への意識の高まりを感じました。花いっぱい活動では、地域の植栽活動に参加させていただきました。園内ビオトープ清掃整備では、園が管理していたビオトープ池の清掃と整備を保護者で取り組むことで、子どもたちも興味をもち、小さな生き物の観察や自然と触れあうことができました。絵本の読み聞かせでは、保護者が降園前に環境問題に関する絵本や紙芝居（ゴミはボクらのたからもの（絵本）やせかいいちぴったりのうち（紙芝居）など）を子どもたちに読み聞かせていました。さらにこれらの活動を通じて、海洋プラスチック問題から子どもたちは床を水上に見立てて、散らかしたプラスチックを拾うなどのストーリーを創造した劇遊びに発展しました。遊びの中からも環境に関わるオリジナルのス



図3 資源回収のためリサイクルボックスの設置、オリジナルエコバッグ作り、廃材リサイクルから発展した作品展、雑巾がけリレーの様子

図4 環境問題に関する絵本や紙芝居の読み聞かせ、花の植栽、子どもたちオリジナルの劇などの教養活動の様子

トリーを組み立てていく子どもたちの想像力に感銘を受けました。いずれの教養活動においても、子どもたちの環境への意識の向上だけでなく、保護者も環境への意識を改める良い機会に繋がっていました。

④おわりに

新潟県でも県国公立幼稚園・こども園協会加入園と園児数が減少していく中、各園でのPTA活動も今まで受け継いできたようにはいなくなってきたのが現状です。その中でも子どもたちの未来のために」できることとして全県で一つのテーマを通して活動してきて、他園の保護者との交流や情報交換を行うことができました。保護者同士のこうした交流を通じて互いに刺激を与えあい、良いと感じた取組や自分の園

でもできそうな取組を参考にしつつPTA活動を考えていくことは、県PTAの目的でもあり、コロナ禍で失われた活動を別の形で立て直すことができたと感じています。

また、活動している中で、コロナ以降、子どもたちと一緒に活動できる機会が減っていたので、今回活動できて良かった、次年度、早めに日程が分かれば子どもたちと一緒に参加できます」など、参加に前向きな意見も多く寄せられました。子どもたちも、家庭でのごみの分別に熱心になったり、町内会などのクリーン活動に主体的に参加するようになったりと、環境保全の意識が育まれているようです。幼児期のうちにしっかりと、大人になってからも自分で生きる力」を身につけてほしいと切に願い、子どもたちの未来のために地域の力も借りながら継続していきたいと思っています。

提案発表

「子どもたちの笑顔のために」 ～できるときに できる形で 助け合って～



山口大学教育学部附属幼稚園
PTA 会長

田口 幸太

1. 園の紹介

本園は、県庁の近くに位置しているにもかかわらず自然いっぱいの幼稚園です。毎日、子どもたちは自分の好きな遊びを見つけ、心と体を目一杯動かし、幼稚園生活を楽しんでいます。

①園児数

現在、各学年1クラスずつ、年少クラスが22名、年中クラスが25名、年長クラスが25名、全園児数は72名です。

②保育の様子

1学期の保育の様子ですが、たくさん泡を作って流してみたり、お花を使って色水ジュースや料理を作ったりしています。また、園庭にはたくさん実のなる木があり、それらを収穫して食べることも、季節ごとの楽しみの一つです。梅雨の合間には、幼稚園の井戸水を使って、水遊びも始まります。

本園は木曜日だけ午前保育で、あとの平日は14時までの保育です。基本は保護者が送迎し毎日顔を合わせるの、親子の顔が見えるのは、本園PTAの強みだと思います。また、他のお子さんの性格や好きなことも把握しているので、我が子だけではなく、幼稚園の子どもたちの成長を感じられるの

も本園の良いところです。

2. 本園のPTA活動について

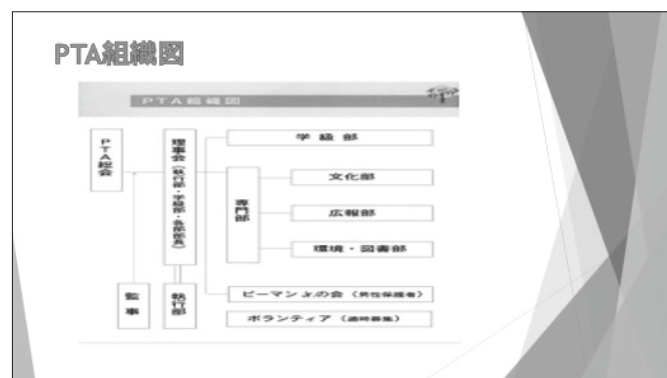
①PTA活動の軸

【できる時に、できる形で、助け合って】を軸としています。近年お仕事をされる方も増えてきました。保護者ができる限り負担を感じることなく、みんなで助け合いながら、自分のペースで活動できるということが大切だと思っています。(孤立して育てるというような) 孤育てという言葉もあり、悲しいニュースも目にします。

PTA活動を通して、保護者にとっても仲間づくりができたり、幼稚園生活が充実し、卒園した際に楽しい園生活だったなと思えたりすることもPTA活動の意義の一つだと思います。

②PTA組織について

学級部は、各クラス2名で6名。専門部は、各クラス1名の3名ずつで編成されています。



③各部の紹介

・文化部の活動について

文化部の活動内容は、保育教材の制作、修理と、講座や講演会の企画、運営があります。



写真は昨年度の様子です。

子どもたちが喜んでくれることを願い、年齢に合わせて、フェルトドーナッツを型紙から製作してくれました。ボランティアを募集し、園で作業できるようにたくさん準備してくれました。細部にまでこだわったとっても素敵なおもちゃを完成させてくれました。

・広報部の活動について

広報部は、広報誌「まなざし」を年間2回（7月と3月）に発行しています。

朝の登園風景を撮影したり、幼稚園まつりや運動会等の行事に撮影班として入ったり、素敵な写真をたくさん撮ってくれています。

広報誌の制作は、まずは誌面の内容と構成を部会で話し合い決定した後、関係各所に原稿を依頼します。取材後は、構成作業をして印刷会社の方とも打ち合わせをします。年度ごとに特集を考えてくれたり、先生方の意外な一面を知ることができて親近感がわいたり、広報誌は園と家庭をつないでくれています。



・環境・図書部の活動について

環境・図書部は、子どもたちがよりよい環境の中で快適に楽しい生活が送れるよう、園内環境の整備や充実を図ってくれています。

保育中は子どもたちが好きな時にこのコーナーを訪れ、保育後には、絵本の貸し出しが行われ、たくさん子どもたちが絵本に触れあう機会を支えてくれています。学期ごとに本があるべきところにあるか、破損していないか、そして、年

度末には、一冊一冊バーコードを通して、すべての本がそろっているか点検してくれています。



・学級部の活動について

学級部は、学級代表として、保護者間の親睦を図ってくれています。学年活動は統一したものではなく、各学年の特徴に合わせて活動しています。

例えば、年少と年中クラスは、新入園児も多いので、交流が図れるようにと「自己紹介カード」を一覧表にまとめて配布してくれました。

また、幼稚園行事とお迎えまでの隙間時間をうまく利用して、懇親会も企画してくれました。初めての集団生活、保護者も不安でいっぱいの中、とても安心されていました。

・卒業委員の活動について

卒業式に向けて、お祝い品や卒業記念品等の選定をしてくれています。他の部も同様ですが、各部ごとに活動記録を毎年ノートに残して引き継ぎがしてあるので、それを参考に担当教諭と相談しながら活動内容を決定しています。また、極力集まらなくていいように基本はLINE等でやり取りを進めます。

・ピーマンJr.の会の活動です。

ピーマンJr.とは、男性保護者の会です。PTAのPと男性のMAN、幼稚園のJr.でつけられた名前ようです。6月に今年度1回目の保育参加がありました。当園は、保育参観ではなく、保育参加で、子どもたちと一緒に遊ぶ日です。子どもたちはいつも以上にダイナミックな遊びに大喜びです。保育参加の後は男性保護者ならではの力を生かして、園の環境整備等してくれました。

また、例年夏休み明け前に除草作業や机のペンキ塗り等子どもたちが新学期に気持ちよく過ごせるよう整備してくれています。2週間後の幼稚園まつりでは、事前注文した飲食物の受け渡しをお父さん方をお願いしています。他にも、運動会のテント張り等たくさんの方にご協力いただいています。

・ボランティアについて

本園のボランティア活動は、人が集まらずに困るというこ

とはなく、たくさん集まったから他の活動を増やそうか!とか、早く終わって助かったね!となるとところがすごいところです。落ち葉掃きや除草作業では当たり前のように園庭に集い、隅から隅まできれいにしてくださる姿がとても素敵で、その姿を子どもたちが見て、手伝いたいという想いを持つのもまた素晴らしいと感じます。

3.まとめ

【できる時に できる形で】をモットーに、負担に感じすぎず、

できる人で助け合って補いあい、達成感や嬉しさもみんなで分かち合って活動しています。

ありがたいことに、R4度優良PTA文部科学大臣賞を受賞いたしました。

先輩方から受け継いだ優しい温かいバトンを、今度は私たちが後進の方に引き継いでいきたい、そんな気持ちでいます。

保護者の意見を取り入れながら、子どもたちにとっても、そして保護者にとっても居心地の良い幼稚園が続くといいなと思っています。

指導助言

文部科学省
総合教育政策局地域学習推進課長
高田 行紀

地域学習推進課長をやっております。地域担当課長はPTAの担当課長、家庭教育や体験活動、コミュニティスクールなども担当しております。

発表順にお話ししていきたいと思います。

【北海道札幌市立きくすいもとまち幼稚園について】

こちらの園はコミュニティスクールにもなっているという事でした。今、行政としてもできるだけコミュニティスクール化していこうということで推進している取り組みの1つです。学校運営協議会に、PTA、地域の自治体、子供会、民生委員、スクールガードなどにも入ってもらい、学校だけが支援を受けるのではなく学校と地域がウィンウィンの関係でいることが望ましいと考えています。例えば、学校の地域学習に地域の人に来てもらい、その内容を充実させたり、逆に地域の伝統行事などを学校にも理解してもらったり、学校側に配慮してもらいながら、運営していく取り組みです。コミュニティの園、学校として地域で人材を育てていくことが取り組まれているのは非常によいと思います。

私は今のポストにつく前はこども家庭庁に出向していました。はじめの100ヶ月ビジョンという形で小一までにどんな資質能力を子供たちにつけてもらうかの話の中で、安心と挑戦というのが1つのキーワードでした。子供たちが安心して挑戦し、挑戦することでの子供たちの不安を学校の先生や親が受けとめ調整できるように、各園が取り組まれていると思いました。

行事についてはPTAの伝統や考え方がありますが、家庭教育を担当している立場としては、合同委員会や子供に対するイベントと同じように親に焦点を当てた取り組みが重要だと考えます。PTA発足の経緯は、幼稚園と学校と家庭、地

域が連携して、子供たちの健全育成のために色々な活動しようと思った取り組みなので、親も一緒に子供たちにどんなことができるのかという観点からPTA活動を形成していくことが重要だと思っているところです。

発表の終わりのところで、PTA活動について自問自答されていることは非常に素晴らしいことです。保護者の負担軽減やPTAの活動を見直しするなど働き方改革が必要となっています。スクラップアンドビルドをしていくことは非常に大切になります。

【新潟県国公立幼稚園こども園PTA協議会について】

濃い内容の発表でした。連絡協議会としての発表も含まれていて、コロナ禍の取り組みの中でいろいろ報告書をまとめていると感じました。

PTA活動では、それぞれの学校ごとに、色々な活動をしていました。地域によっていろいろ差があり、当然活動に差があつてよいと思いました。専業主婦が多いところもあれば、共働きが多いところもある、家庭の層によってできるかできないか変わってくる、自分たちの活動が本当にこれでいいのだろうかと不安な場合は、全国の協議会で、お互い情報交換し刺激し合ったり、切磋琢磨したりすることが非常に重要だと思いました。こういった活動の取り組みを紹介していただき、連絡協議会の新たなあり方について勉強になりました。報告もコロナの影響で、オンラインで行うなど大分変わってきています。

ごみ拾い活動や、リサイクルの活動などは、子供は親の姿勢を見ています。親を見て子供も育つところがあると思うので、このような活動で、親も学びながらやっていくのが重要であります。

油田が発掘された地域ということで、地域のことを知ることは非常に大切なことです。地域ならではの内容をいろいろな活動に加えていく事も重要と思いました。

【山口大学教育学部附属幼稚園について】

久しぶりに附属幼稚園の取り組みを拝見させていただきました。がっちりとした取り組みをずっと続けてきている様子がわかりました。附属の場合は保護者層や伝統などがしっかり

りしていて、取り組み自体もきちんとした引き継ぎがされていて素晴らしいと思います。そのような中で、この活動は何のためにやっているのか、これからどうしていくのかというアップデート、見直しが重要だと思いました。

私の子供が通っていた幼稚園がこの10年ぐらいてがらりと変わりました。私立で地元の人を中心に伝統的な幼稚園のPTA活動をしていました。都会の幼稚園で、給食や園バスがないことで一気に人気がなくなり定員割れしてしまいました。次の年にバスや給食が出るようになり、預かり保育も始まり、共働きの家庭がどんどん入園しました。そうしたところPTAの活動がオンラインでなければ無理だとか、土日にメールでやりとりしようなどと保護者の考えも変わっていったという事がありました。山口大学付属幼稚園の取り組みも、今、学習指導要領の改訂の議論が進んでいるところですので、令

和版のPTA活動の在り方を改めて議論していくとよいと思います。

【最後に】

先日、学力学習状況調査結果が出ましたが、勉強時間が減り、SNS、YouTubeを見ている時間が増加しています。昔(昭和的に)は時間を決めて夜9時までだとか1時間までという事を子供にさせていたが、今、子供は言うことを聞かないし強権的にもできません。逆に親が守れていないと思います。親も一緒にどうしたらいいか考えていかなければいけません。

学校図書にかかわっていますが、昔のデータ整備もどんどんしなければいけなくなっています。電子図書のなものも増えていく中で、アップデートが必要となっています。

PTA活動も時代に合わせ一緒になって考え努力していく必要があると考えているところです。

指導助言

全国国公立幼稚園・こども園長会 会長
高橋 慶子 氏

3つの実践報告を拝見して、各園の特色を生かしながら、子供たちの笑顔と生きる力を育むために、そして保護者や園全体の関係性も育むために取り組む様子が懸命につづられていて、多くの気付きをいただきました。

＜きくすいもとまち幼稚園＞

子供の生きる力の源は、愛着の形成とも言われております。手作り市やこども縁日では、『誰かが作ったもの』ではなく、『顔の見える誰かが、自分のために心を込めて用意してくれたもの』を手にする体験になっていると思いました。大切にされているという実感が、子供たちの生きる力の土台づくりになっていると拝見いたしました。

そしてこども縁日の開催は、関わり合い手をつなぎ合う姿をPTAの方がモデルとなって見せていることで、楽しかった経験が、子供の次の遊びに取り込まれているのではないかと推察されました。次なる遊びの展開が、個々や集団の充実にも、また集団から個の充実にもつながっていると思われました。

保護者の皆様が、サロンのような会を開いてくださっていることも、安心感・安定感につながっており、そうした安心感のもとで過ごす子供たちは、笑顔がたくさん見られるのではないかなと思いました。とても愛情たっぷりのPTA活動を聞かせていただきました。

＜新潟県国公立幼稚園・こども園PTA連絡協議会＞

この活動は一日にしてならずだと思います。『イベントや体験ではなく経験を』ということで、一日一日の体験が積み

重なって経験になっていく、そしてその経験は継続がとても大事なんですよね。PTAの方々と一緒にする経験がお散歩にも生かされて、またお散歩の経験がPTAの活動にも生かされて、『行動する』ということと、子供が「これはお母さんと一緒に拾うかな」、等という『思考力・判断力』を培っている、身近な物事を自分事として捉えて、課題として行動しているプロセスがよくわかりました。そしてその行動を裏付ける『知識・技能』を教養活動としてPTAの方がしてくださっていました。活動を通じて、幼児に育みたい3つの資質能力を、子供たちが自然に学んでいるところが、素晴らしい活動だな、生きる力につながっているなと思いました。

よく『自己肯定感』と言われるかもしれませんが、私『自己有用感』がとても大事だと思っていて、「学級や地域・社会のために、僕・私は役に立っているよ」って思うことで、自己有用感が育ち、それが自己肯定感になっていくのかなという風に私は思っているんです。その自己有用感を、地域の皆さんが「ありがとう」って言うことで達成されていると思うと、地域も巻き込んで、そしてPTAの方と県でも取り組んでいるということは、新潟県はSDGsの県と言ってもいいのではないかと感じさせていただきました。

＜山口大学教育学部附属幼稚園＞

幼稚園教育要領には、環境を通して、遊びを通した総合的指導と言われています。その環境を通した教育の一部を担っていただいていると思いました。丁寧におもちゃを作ったり草むしりをしたり、いい環境をつくり設定していただいているなと思いました。その環境を生み出すために、PTAの方々が会員の皆様とつながっているのだろうなというのがとてもよくわかりました。その環境づくり、ボランティアの精神に感謝の気持ちでいっぱいです。また、男性保護者の参加は子供たちもすごく嬉しいんですよね。あれだけ広いと、先生方だけでは環境づくりがとても大変なところを見取っていただ

き、整えていただいていることが、とても助かっているのではないかと思います。園とPTAとが手を取り合っている様子をうかがいました。

3園の報告から、今の時代にふさわしいPTAの在り方を模索している様子がうかがえました。在り方や取り組み方、その精神というところを基盤にして、園や子供たちのために、そして地域への愛着のために『つながる』ということを目指し、また母校・母園への愛着にもつながっていくのかなと思っ

ています。そして、全国でこの実践が共有されたことが、とても意味あることだと思いました。大会の主旨、生きる力を育み、分かり合い、こうして手をつなぎ合うことができたこの大会で、お互いを幸せに守り育てるそれぞれの希望郷で、それぞれの地域や県で、岩手を通して育んでいただけたらと思った次第でございます。

ぜひ、3園のご発表を通じて、全国のPTAの皆様の発展、そして活動の充実につながればと思いました。

令和7年度 優良PTA文部科学大臣表彰

おめでとう

令和7年度優良PTA文部科学大臣表彰

岩手県 好摩幼稚園PTA
京都府 乾隆保育会
兵庫県 神戸市立兵庫くすのき幼稚園PTA
岡山県 岡山市立芳田幼稚園PTA

山口県 平生幼稚園若葉会
徳島県 石井町藍畑幼稚園PTA
愛媛県 北吉井幼稚園PTA

●岩手県 盛岡市立好摩幼稚園 活動紹介

PTA活動と幼稚園行事が一緒になった
あきまつり
～支え合いとつながりを大切にして～

PTA会長 高橋 里美

はじめに

この度、全国国公立幼稚園・こども園PTA全国大会において令和7年度優良PTA文部科学大臣表彰という名誉ある賞を受賞することができました。会員一同大変嬉しく思っています。これもひとえに歴代PTA役員と会員の努力、地域の皆様の温かいご協力とご支援の賜物と心より感謝しております。

盛岡市北部に位置する好摩は、岩手山と姫神山を間近に望む自然豊かな地域です。本園では、「げんきに なかよく考える」を教育目標のもと、子どもと教職員の笑顔の中で生き生きと幼児教育を推進しています。小規模幼稚園として子



ども一人一人に寄り添った保育と特色ある園活動を推進しています。

支え合いとつながりを大切にしたPTA活動の実践

近年、園児数・PTA会員数の減少に伴い、これまで継続してきたPTA活動にも支障をきたすようになってきました。そこで、たくさんの活動を行うより取り組む行事を精選することで持続可能やPTA活動を模索することにしました。

○取組の概要

- ・少子化に対応した組織づくり
- ・PTA交流会の実施（毎年5月に開催）
- ・PTA活動と幼稚園行事が一緒になった「あきまつり」の実施
- ・「PTAぐるぐる文庫」の活動の継続

○取組の詳細

【少子化に対応した組織づくり】

保護者のPTA加入率は100%であり、会員全員が役員となり一人一役の役割を受けもって活動しています。会員の負担を考慮して、取り組む行事をPTA活動と幼稚園行事を共同開催した「あきまつり」を中心活動と位置付けています。

【PTA交流会】

PTA総会開催後、最初の活動はPTA交流会です。会員相



互の親睦を図るために行っています。年長組の保護者が中心となって企画運営します。内容は、自己紹介と簡単なゲームです。写真は、ゲームの内容を説明している場面です。交流会によって会員のつながりが生まれ、楽しく円滑に活動するための原動力となっています。

【あきまつりにおける効果的な運営】

PTA活動と幼稚園行事が一緒になった「あきまつり」での実際の様子です。

〈幼稚園が担当するおみこし〉



〈PTAが担当する遊びコーナー〉



あきまつりの実施に当たっては、保護者と先生方が連携協力して事業を実施するための工夫としてPTA案と先生案を互いに出し合い検討を繰り返すようにしました。新しいアイデアがうまれやすく、活動を盛り上げることに役立ったり、アイデアが重なり合うことで会員が自分たちでやろうとする意識を高めたりすることに効果がありました。また、活動のための資料を毎年保存し、次年度に生かしていくことにより持続可能な活動にしようと考えています。

会員の負担を減らすための工夫として「仕事の見える化」に取り組んでいます。あきまつりの遊びコーナーの運営に役立てるために、取り組み方の説明書を作成しました。

また、試作品を実演したり過去の写真を提示したりしました。具体物を提示したことにより見通しをもって活動することができました。

〈PTA作成「説明書」負担を減らす工夫〉



時代や環境の変化に伴う暮らし方の多様化を考慮した工夫として、SNSを活用して連絡を取り合うことにしています。仕事の進捗状況がわかり、タイムリーに連絡調整ができました。わざわざ集まらなくてもよくなりました。また、気楽に発信・応答できることにも役立っています。

【PTAぐるぐる文庫】

「PTAぐるぐる文庫」として保護者や先生方が推薦する図書を読み合う活動を大事にしています。今月の本を読んで親子で話題にした後、感想を書いて回覧する活動を行っている。紹介された本のどこがいいのか、幼児期の子供に読ませたい良書とはどのような本なのか等、良書を選ぶ観点について会員相互間で学んでいます。また、ぐるぐる文庫の活動の充実

に伴って、図書ボランティアの活動も根付いてきています。絵本部屋の装飾や図書館だよりを発行しています。

おわりに

支え合いとつながりを意識したことにより、安心して気軽にPTA活動に参加できると感じている保護者が増えました。また、取り組みにより達成感や充実感が得られ、次の活動への意欲の高まりにつなげることができました。会員の減少に応じた運営と適材適所に配置した組織づくりを心がける必要があります。何よりも温かみのあるPTA活動を継承していくことが大事だと考えています。



〈令和5年と6年の先輩役員に受賞の報告〉

●岡山県 岡山市立芳田幼稚園 活動紹介

「子どもたちのために。そして自分たちも楽しんで！」

PTA会長 和泉 明日香

この度、令和7年度優良PTA文部科学大臣表彰の栄を賜りましたことを、園の保護者、職員一同、大変喜んでおります。このようなすばらしい賞を受賞することができましたのは、決して本園の力だけではなく、これまでPTAのあるべき姿を示し導いてくださった猪木直樹様をはじめ全国国公立幼稚園・こども園PTA連絡協議会の存在、いつも温かく見守ってくださる地域や団体、行政など多くの方のご支援があってこそと、心より感謝申し上げます。

本園は、近くにJR瀬戸大橋線、国道30号線、国道2号線が縦横に走る岡山市の南西に位置し、昭和9年に創立され、令和6年2月には創立90周年を迎えた幼稚園です。現在は園児数の減少により複式学級1クラス10名となっておりますが、隣接する小学校との交流や地域とのつながりも強く、「心豊かにたくましく生きる子どもを育てる」という教育目標に向け、頑張っています。子どもたちの幸せを願い、少人数ですが「できる時に、できる人が、楽しく行う！」をモットーにPTA活動に取り組んでいます。



【現在の状況に合ったPTA組織への改編】

これまで何度か、会員数に合わせて組織を改編してきました。現在は、総務部の会長、副会長、会計監査のみを残し、専門部は休部としています。休部といっても、これまでの活動を全て止めたわけではなく、総務部を中心に活動を精選しながら取り組んでいます。また、オンラインツールの活用により参集しての協議等を少なくし、無理なく、効果的な活動となるよう柔軟に考えながら行っています。

【芳田幼稚園のPTA活動】

○生活習慣の定着のためにPTAにできること

基本的な生活習慣の定着は、これから小学生、中学生と成長していく子どもたちの生涯の支えとなる大切なものだと考えています。そこで、「あいさつ運動」「歩こう週間」「メディアコントロール週間（習慣）」等の取組をしています。

・「あいさつ運動」…学期に1回、登園してきた人から親子で園門に立ち、後から登園してくる親子を迎えるあいさつ運動。年度当初は、恥ずかしくて小さな声だった子どもたちも、次第に元気よくあいさつができるようになっていきます。地域の連合町内会長さんや民生委員児童委員協議会の方も参加してくださり、園児に声を掛けてくださいます。地域の方たちにも、自分からあいさつをしたり、登園時にあったことを話したりする姿が見られ、心が温かくなります。



・「歩こう週間」…車で移動がどうしても多くなりがちな昨今ですが、交通ルールを守ったり、雨の日は傘をさしたりして安全に歩くことができるようになってほしいと考えています。そこで、少し園生活に慣れてきた6月、気候のよい11月、年長組は小学校入学に向けて意識が高まる2月の年3回、「歩

いて幼稚園に登園しよう！」と声を掛け合って取り組んでいます。それぞれ5日間あるので、「今日はできなかったけれど明日は挑戦しよう!」「友達と一緒に頑張るぞ!」と互いに刺激を受け、意欲的に歩く姿が見られます。頑張って歩いた日は、PTAが作成したカードにシールが貼ってもらえることも、頑張る意欲や充実感につながっています。

その他にも、幼稚園と共催で実施している「親子交通安全教室」、園門前の横断歩道を安全に渡ることができるよう見守る「交通当番」を行っています。



・「メディアコントロール週間（習慣）」…この活動は、平成27年から中学校区のPTAが協力して行っているもので、様々な情報機器を適切に使い、自分でコントロールする力を身につけてほしいという願いをもって取り組んでいます。「小中学生のきょうだいとも一緒に取り組むことができよう」という意見が多く聞かれます。きょうだいの有無や家庭の状況に違いがあることを考慮して、芳田幼稚園では親子で相談して自分に合った目標を考えることができるよう工夫しています。

この取り組みを通して、時間を決めてメディアを活用することにより、親子でかかわる時間が増え、家族の会話が豊かになったという家庭が多く、メディアとのかかわりを見直すきっかけとなっています。

○親子で一緒に取り組むことで子どもの成長を実感

保護者が自主的に取り組むボランティア活動として、「読み聞かせ隊」「育て隊」「見守り隊」があります。参加した保護者からは、参観日には見られない子どもの姿を見ることができたり、幼稚園教育で大切にしていることを知ったりすることができると好評です。

・「読み聞かせ隊」…子どもたちの発達段階や季節に合った絵本を先生に相談しながら選び、降園前の15分程度読み聞かせをしています。子どもたちは毎回楽しみにしてくれ、一緒に絵本のおもしろさを共有する時間となっています。また、家庭での読み聞かせの実践にもつながっています。



・「育て隊」…幼稚園では様々な花や野菜を育てています。さつまいもや夏野菜の苗植え、アサガオやフウセンカズラ、

ダイコンやカブの種まき、そして、それぞれの収穫等。それらの活動時、子どもたちの活動の補助をしています。間近で聞く子どもたちの感動の声や、活動前後の元気のよいあいさつに疲れも吹き飛びます。



・「見守り隊」…幼稚園の子どもたちは、夏には小学校のプールを使わせていただき、水遊びをしています。プールでの活動が、より安全で楽しいものとなるようにと願って、交代でプールサイドでの見守りをしています。



○様々な研修が自分自身の成長につながる

園内でのPTA人権研修、岡山市国公立園PTA連合会等の研修を通して様々な気づきがあり、自分の子育てを振り返ることができました。共に研修した仲間とは、互いの思いや悩みを共有し、さらにつながりが深まりました。

〈参加者のアンケートより〉

- ・子どもの心の声（願いや訴え）を丁寧に聴き取ること、子どものよさに目を向けることの大切さを感じました。また、「親も人間だから完璧ではない」という言葉に気持ちが楽になり、前向きに頑張ろうという気持ちになりました。
- ・非認知能力（心の教育）を幼児期から遊びの中で育てていくことが重要であるということや、子どもとのよい関係を築くには、まず子どもが「自分は認められている」と感じることで、つまり自尊心を育て、自信を持たせることが大切であるということを学びました。

【おわりに】

コロナも落ち着き、少しずつ茶話会等、保護者自身のための活動が増えてきています。今後、認定こども園に移行する本園では、その年に合ったPTA活動を模索しながら活動していくことになると思います。どんな状況にあっても、子どもたちの笑顔と共に、保護者自身が喜びを感じることでできるようなPTAを目指し、仲間たちとのつながり、地域とのつながりを大切に、一步一步進んでいきたいと思っています。

文部科学省講話 「幼児の現状と今後の展望」

文部科学省
初等中等教育局 幼児教育課長
石田 善顕

文部科学省初等中等教育局幼児教育課長に、7月15日に赴任をしました。幼稚園を取り巻く行政、幼稚園に対する支援、幼稚園教諭の養成等について、幼稚園に関することを幅広く、赴任してから3週間のところで学んだところを皆さんにお伝えできればと思います。

今日は、「幼児教育の現状と今後の展望」について、主に3つのことをお話しさせていただきます。1つは、幼児教育に関係するデータに基づいて、今後の幼児教育に重要なこと「子どもたちを取り巻く現状」についてです。もう1つは、「幼保小の接続」について、幼稚園の中で何を教えていくのか重要な部分であり、文部科学省で力を入れているところでもありますので、お話しさせていただきます。最後に、「幼児教育の重要性について」データでしっかりと示しながら、説明をさせていただきたいと思います。

1つ目の、「子どもたちを取り巻く現状」についてです。私たちが考えていかなければいけない1つの大きなバックグラウンドは、人口減少です。資料に示してあるとおり、人口の推移と将来設計、子どもの人口将来設計を見ても分かるように、減少傾向にあります。OECD加盟国の生産年齢人口の将来予想においても、日本は2060年には最下位になると予測されています。一方で、国境を越えた人の動きが増え、学校、教育全体における多様性が重要になり、社会そのものもいろいろ変化しています。こうした新しい社会の中で生きていく子どもたちを、しっかり教育していかなければいけないということも、全体のバックグラウンドです。課題として、10年前と大きく違うポイント、インターネットの利用状況があります。インターネットの利用が増え、「フィルターバブル現象」や「エコーチェンバー現象」が生まれやすい状況の中で、自分の考えをしっかりと、判断できるという教育をしていかなければいけません。

次に、3要領・指針の改訂についてです。10年に1度の学習指導要領、幼稚園教育要領の改訂の重要な時期にきて

います。大きな審議事項として、4つの視点が挙げられています。その中で、「幼児教育と小学校教育との円滑な接続の改善の在り方、設置者や施設類型を問わず、幼児教育の質の向上を図る共通の方策」について、大きく書かれています。これは、共通して質の高い教育を提供しなければいけない、ということが大きなテーマになっています。また、幼児の遊びや生活に関する現状と課題を踏まえ、考えられる方向性として議論が始まっています。幼稚園教育要領だけでなく、こども園教育・保育要領、保育所保育指針すべてにおいても、質の高い幼児教育ができるように整合性を図りながら議論することも重要となっています。

幼保小の接続についてです。幼児教育と小学校教育は、円滑な接続を図ることは容易ではないため、5歳児から小学校1年生の2年間で「架け橋期」と称して焦点を当て、0歳から18歳までの学びの連続性に配慮しつつ、「架け橋期」の教育の充実を図り、生涯にわたる学びや生活の基盤を作ることが重要と示されています。「架け橋期のカリキュラム」は、幼保小が共通の視点を持ちながら、協働して作成していくことが1つの方針として示されています。また、幼保小の接続は、国際的にも重要視され、文部科学省でも縦のつながりをしっかり行っていきたいとしています。具体的には、幼児教育推進体制等を活用した幼児期及び幼保小接続期の教育の質向上に関する体制づくりをお願いしています。どの自治体でも取り組んでもらえるよう、国としてサポートもできるようにしています。さらに、コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進として、保護者の方が学校の運営に関わる仕組みができてきています。幼保小が連携しようとしたときに、協働して連携が図れるよう、大切なことを地域、保護者が後押しをしていたければありがたいと思います。

最後に、幼児教育の重要性の理解促進のために、今後は調査・研究から得られた実証データの分析によるエビデンスに基づきながら、政策形成に取り組むことが重要とされています。こうした調査依頼が届いた際には、ぜひご協力をお願い致します。



全国国公立幼稚園・こども園
PTA連絡協議会章

第64回全国国公立幼稚園・こども園PTA全国大会

東京開催ご案内

全国国公立幼稚園・こども園PTA連絡協議会全国大会も、回を重ねて第64回をむかえます。長らく継続して開催し続けることができていのも、会員の皆様をはじめ、国公立の幼児教育を提供する学び舎を大切に守ってこられた全国各地の先輩方のおかげです。いつもご協力ご助力をいただき、本当にありがとうございます。

去年は、岩手県盛岡市にて岩手大会を開催し、全国の仲間の皆様と幼児教育について研修の機会をもちました。岩手の仲間の皆様、お世話になり本当にありがとうございました。会員の皆様はご承知のことかと存じますが、今回より地方開催ではなく東京開催となります。

この間、少子化、私立化、こども園（保育所）化等の外的要因の影響を大きく受け、私たちの関わる公立幼稚園・こども園は、園数や在籍園児の数を大きく減らしています。しかしながら、会員数が減少したからと言って、幼児教育を守るべき組織の必要性が低下するわけでは決してありません。主題につきまして、文部科学省やこども家庭庁より、直接お話を聞かせていただく予定となっております。

会員の皆様。ぜひ、国の考える方向性を直接お聞きいただくためにも万障お繰り合わせの上、真夏の東京代々木の森にご参集賜りたく、切にお願い申し上げます。

何卒ご参加
よろしくお願い
いたします



☆開催日 令和8年8月2日（日）
☆場 所 国立オリンピック記念青少年総合センター
☆主 題 「これからの国公立幼稚園・こども園の在り方の方向性とPTA組織の担うべき役割」

監事	特任理事	副会長	役員
福原良子	黒木愛子	初澤美香	吉田尚来
森永未義	紫瀬和子	野村卓也	谷村利貴
森川忠克	中瀬博喜	岩崎弘史	

佐藤忍	楚阪博	深町芳弘	高橋慶子	箕輪恵美	新山裕之	関美津子	岩城眞佐子	荒木尚子	池田多津美	岡上直子	酒井幸子	新司英子	清松督雄	大関敏寛	太田慎彦	今井昇	上枝秀則	猪木直樹	顧問
(全国国公立幼稚園・こども園長会事務局長)	(前全国国公立幼稚園長会事務局長)	(元全国国公立幼稚園長会事務局長)	(全国国公立幼稚園・こども園長会会長)	(前全国国公立幼稚園・こども園長会会長)	(元全国国公立幼稚園・こども園長会会長)	(元全国国公立幼稚園・こども園長会会長)	(元全国国公立幼稚園・こども園長会会長)	(元全国国公立幼稚園長会会長)	(元全国国公立幼稚園長会会長)	(元全国国公立幼稚園長会会長)	(元全国国公立幼稚園長会会長)	(前全幼P事務局長)	(前全幼P副会長)	(元全幼P副会長)	(元全幼P副会長)	(元全幼P副会長)	(元全幼P副会長)	(前全幼P会長)	

令和7年度
顧問・役員のご紹介